

五輪書

宮本武蔵

目次

地之卷
水之卷
火之卷
風之卷
空之卷



24 20 13 6 1

地之卷

序

兵法の道、二天一流と号し、数年鍛錬の事、初而書物に顕さんと思ひ、時に寛永二十年十月上旬の比、九州肥後の地岩戸山に上り、天を拝し、観音を礼し、仏前にむかひ、生国播磨の武士新免武蔵守藤原の玄信、年つもつて六十。

我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。其のあいて、新当流有馬喜兵衛と云ふ兵法者に打勝ち、十六歳にして但馬国秋山と云ふ強力の兵法者に打勝つ。廿一歳にして都へ上り、天下の兵法者にあひ、数度の勝負をけつすといへども、勝利を得ざると云ふ事なし。其後国々所々に至り、諸流の兵法者に行合ひ、六十余度まで

勝負をすといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十二より廿八、九迄の事也。

我、三十を越て跡を思ひ見るに、兵法至極にして勝にはあらず。をのづから道の器用有りて、天理をはなれざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや。其後なをも深き道理を得んと、朝鍛夕錬してみれば、をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の比也。其より以来は、尋ね入るべき道なくして、光陰を送る。

兵法の利にまかせて、諸芸・諸能の道となせば万事に於て、我に師匠なし。今此書を作るといへども、仏法・儒道の古語をもからず、軍記・軍法の古きことをもちひず、此一流の見たて、実の心を顕す事、天道と観世音を鏡として、十月十日の夜寅の一てんに、筆をとつて書初るもの也。夫兵法といふ事、武家の法なり。將たる者は、とりわき此法をおこなひ、卒たる者も、此道を知るべき事也。今世の中に、兵法の道慥にわかまへたるいふ武士なし。先づ、道を顕はして有るは、仏法として人を助くる道、又儒道として文の道を糺し、医者といひて諸病を治する道、或は歌道者として和歌の道を教へ、或は数寄者・弓法者、其外諸芸・諸能までも、思ひ思ひに稽古し、心々に好くもの也。

兵法の道には好く人まれ也。先づ、武士は文武二道といひて、二つの道を嗜む事、是道也。縦ひ此道不器用なりとも、武士たるものは、おのれおのが分際程は、兵の法をば勤むべき事なり。大形武士の思ふ心をはかるに、武士は只死ぬるといふ道を嗜む事と覚ゆるほどの儀也。

死する道に於ては、武士斗にかぎらず、出家にても、女にても、百姓以下に至る迄、義理をしり、恥を思ひ、死する所を思ひ切る事は、其差別なきもの也。武士の兵法を行ふ道は、何事に於ても人にすぐるゝ所を本とし、或は一身の切合に勝ち、或は数人の戦に勝ち、主君の為、名をあげ身をたてんと思ふ。

是、兵法の徳を以てなり。又世の中に、兵法の道をならひても、実の時の役にはたつまじきと思ふ心あるべし。其儀に於ては、何時にても、役にたつやうに稽古し、万事に至り、役にたつやうにおしゆる事、是兵法の實の道也。

一、兵法の道と云ふ事

漢土・和朝までも、此道を行ふ者を、兵法の達者といひ伝へたり。武士として此法を学ばずといふ事あるべからず。近代、兵法者といひて世を渡る者、是は剣術一通りの事也。常陸国鹿島・香取の社人ども、明神の伝へとして流々を立て、国々を廻り、人に伝ゆる事、近きころの儀也。古へより、十能・七芸と有るうちに、利方といひて、芸にわたるといへども、利方と云出すより、剣術一通りに限るべからず。剣術一篇の利までにては、剣術も知りがたし。勿論、兵の法には叶ふべからず。

世の中を見るに、諸芸を売物にしたて、我身をうり物のやうに思ひ、諸道具につけても、うり物にこしらゆる心、花実の二つにして、花よりも実のすくなき所也。とりわき此兵法の道に、色をかざり、花をさかせ、術とてらひ、或は一道場、或は二道場などいひて、此道をおしへ、此道を習ひて、利を得んと思ふ事、誰かいふ、「なま兵法大疵のもと」、まことなるべし。

凡そ人の世を渡る事、士農工商とて四つの道也。一つには農の道。農人は色々の農具をまうけ、四季転変の心得いとまなくして、春秋を送る事、是農の道也。

二つには商の道。酒をつくるものは、それぞれの道具をもとめ、其善悪の利を得て、渡世をおくる。何れも商の道、其身々々のかせぎ、其利を以て世を渡る事。是商の道。

三つには士の道。武士に於ては、道さまさまの兵具をこしらへ、兵具しなじの徳をわきまへたらんこそ、武士の道なるべけれ。兵具をもたしなまず、其具々々の利をも覚えざる事、武家は少々たしなみのあさき物か。

四つには工の道。大工の道に於ては、種々様々の道具をたくみこしらへ、其具々々を能くつかひ覚え、すみがねを以て、そのさしづをただし、いとまもなくそのわざをして世を渡る。

是、士農工商、四つの道也。兵法を大工の道にたとへていひあらはす也。大工にたとゆる事、家といふ事につけての儀也。公家・武家・四家、其家のやぶれ、家の続くといふ事、其流・其風・其家などいへば、家

といふより、大工の道にたとへたり。

大工は大きにたくむと書くなれば、兵法の道、大きなたくみに依て、大工にいひなぞらへて書頭はす也。兵法を学ばんと思はゞ、此書を思案して、師は針、弟子は糸となつて、絶えず稽古有るべき事也。

一、兵法の道、大工にたとへたる事

大將は大工の頭領として、天下の規矩をわきまへ、其国の規矩を糺し、其家の規矩を知る事、頭領の道也。

大工の頭領は堂塔伽藍の墨金を覚え、宮殿樓閣のさしづを知り、人々をつかひ、家々を取立つる事、大工の頭領も武家の頭領も同じ事也。家を立つるに木くばりをする事、直にして節もなく、見つきのよきをおもての柱とし、少し節有りとも、直につよきをうらの柱とし、たとひ少し弱くとも、節なき木のみさまよきをば、敷居・鴨居・戸障子と、それぞれにつかひ、節有りとも、歪みたりとも、つよき木をば、其家の要所々々を見分けて、能く吟味して使用するに於ては、其家久しく崩れがたし。

又材木のうちにしても、節多く、歪みてよわきをば、足代ともなし、後には薪とも為すべき也。頭領に於て大工をつかふ事、其上中下を知り、或は床廻り、或は戸障子、或は敷居・鴨居・天井以下、それぞれにつかひて、悪しきには根太をはらせ、尚悪しきには楔を削らせ、人を見わけつつかへば、其果敢行きて、手際善きもの也。

果敢の行き、手ぎわよきといふ所、物毎をゆるさざる事、たいゆう知る事、気の上中下を知る事、いさみを付くるといふ事、無体を知るといふ事、かやうの事ども、頭領の心持に有る事也。兵法の利かくの事とし。

一、兵法の道

士卒たるものは大工にして、手づから其道具をとぎ、色々のせめ道具をこしらへ、大工の箱に入れて持ち、頭領云付くる所をつけ、柱が虹梁をも手斧にて削り、床・棚をも鉋にて削り、透し物・彫り物をもして、

よく規矩を糺し、すみずみめんどつ迄も手ぎわ能くしたつる所、大工の法也。大工の業、手にかけて能く仕覚へ、墨金をよく知れば、後は頭領となる物也。大工の嗜み、よくきるる道具を持ち、透々にとく事肝要也。其道具をとつてみづし・書棚・机卓・又は行燈・まないた・鍋のふた迄も達者にする所、大工の専也。

士卒たるもの、このごとく也。能々吟味有るべし。大工の嗜み、ひずまざる事、とめをあはする事、匏にて能くけづる事、すりみがかざる事、後にひすかざる事、肝要也。此道を学ばんと思はゞ、書頭す所の条々に心を入れて、よく吟味有るべきもの也。

一、此兵法の書、五巻に仕立つる事

五つの道をわかち、一卷一卷にして其利を知らしめんが為に、地水火風空として五巻に書頭す也。

まず、地の巻におゐては、兵法の道の大躰、我が一流の見立、劍術一通りにしては、誠の道を得がたし。大きな所よりちいさき所を知り、浅きより深きに至る。直なる道の地形を引きならずによって、初を地の巻と名付く也。

第二、水の巻。水を本として、心を水になる也。水は方円のうつわものに随ひ、一滴となり、滄海となる。水に碧潭の色あり、清き所をもちひて、一流の事を此巻に書頭す也。劍術一通の理、さだかに見分け、一人の敵に自由に勝つ時は、世界の人に皆勝つ所也。一人に勝つと云い心は千万の敵にも同意也。將たるものの兵法、ちいさきを大きになす事、尺のかたを以て大仏をたつるに同じ。か様の儀、こまやかには書分けがたし。一を以て万と知る事、兵法の利也。一流の事、此水の巻に書記す也。

第三、火の巻。此巻に戦ひの事を書記す也。火は大小となり、けやけき心なるによつて、合戦の事を書く也。合戦の道、一人と一人との戦ひも、万と万との戦も、同じ道也。心を大きな事になし、心をちいさくなくて、能く吟味して見るべし。大きな所は見えやすし、ちいさき所は見えがたし。其仔細、大人数の事は即坐にもとをりがたし。一人の

事は心一つにて変る事はやきによつて、ちいさき所しる事得がたし。能く吟味あるべし。

此火の巻の事、はやき間の事なるによつて、日々に手馴れ、常のごとく思ひ、心のかはらぬ所、兵法の肝要也。然るによつて、戦ひ勝負の所を火の巻に書頭す也。

第四、風の巻。此巻を風の巻とする事、我一流の事にはあらず、世中の兵法、其流々の事を書のする所也。風といふに於ては、昔の風、今の風、其家々の風などとあれば、世間の兵法、其流々のしわざを、さだかに書頭はす、是風の巻也。他の事を能く知らずしては、自らのわきまへ成りがたし。道々事々をおこなふに、外道と云ふ心あり。

日々に其道を勤むるといふとも、心のそむけば、其身はよき道と思ふとも、直ぐ成る所より見れば、実の道にはあらず。実の道を極めざれば、始め少し心のゆがみに付けて、後には大きにゆがむもの也。吟味すべし。他の兵法、劍術ばかりと世に思ふ事、尤也。我兵法の利わざに於ても、各別の儀也。世間の兵法を知らしめんが為に、風の巻として、他流の事を書頭す也。

第五、空の巻。此巻空と書頭す事、空と云出すよりしては、何をか奥と云ひ、何をか口といはん。

道理を得ては道理をはなれ、兵法の道に、おのれと自由有りて、おのれと奇特を得、時にあひては拍子を知り、おのづから打ち、おのづからあたる、是皆空の道也。おのれと実の道に入る事を、空の巻にして書きとむるもの也。

一、此一流、二刀と名付くる事

二刀と云出す所、武士は將卒ともにぎきに二刀を腰に付る役也。昔は太刀・刀と云ひ、今は刀・脇差といふ。武士たるもの此両刀を持つ事、こまかに書頭すに及ばず。我朝に於て、知るもしらぬも腰にぶ事、武士の道也。此二つの利を知らしめんために、二刀一流といふ也。鎧・長刀よりしては、外の物といひて、武道具のうち也。

一流の道、初心のものに於て、太刀・刀両手に持ちて道を仕習ふ事、
実の所也。一命を捨つる時は、道具を残さず役にたてたきもの也。道具
を役にたてず、腰に納めて死する事、本意に有るべからず。然れども、
両手に物を持つ事、左右共に自由には叶ひがたし。太刀を片手にて取り
ならはせん為也。鑓・長刀、大道具は是非に及ばず、刀・脇差に於ては、
いづれも片手にて持つ道具也。

太刀を両手にて持ちて悪しき事、馬上にて悪し、かけ走るとき悪し
。沼・ふけ・石原、険しき道、人ごみに悪し。左に弓・鑓を持ち、其
外何れの道具を持ちても、みな片手にて太刀を使ふものなれば、両手に
て太刀を構ゆる事、実の道にあらず。若し片手にて打ころしがたき時は、
両手にても打ちとむべし。手間の入る事にも有るべからず。先ず片手
にて太刀を振りならはせん為に、二刀として、太刀を片手にて振り覚ゆ
る道也。人毎に初而とする時は、太刀重くて振廻しがたき物なれども、万
初めて取り付る時は、弓も弯きがたし、長刀も振りがたし。

いづれも其道具、道具に慣れては、弓も力つよくなり、太刀も振りつ
けぬれば、道の力を得て振りよくなる也。太刀の道といふ事、早く振る
にあらず、第二水の巻にてしるべし。太刀は広き所にてふり、脇差はせ
ばき所にてふる事、先づ道の本意也。此一流において、長きにても勝ち、
短きにても勝つ。

故によつて太刀の寸を定めず、何にても勝つ事を得る心、一流の道也。
太刀一つ持ちたるよりも、二つ持ちてよき所、大勢を一人して戦ふ時、
又とり籠もりものなどの時によき事有り。かやうの儀、今委敷書頭すに
及ばず、一をもつて万を知るべし。兵法の道行ひ得ては、一つも見へず
といふ事なし。能々吟味るべき也。

一、兵法二つの字の利を知る事

此道に於て、太刀を振得たるものを、兵法者と世に云伝へたり。武芸
の道に至りて、弓を能く射れば射手といひ、鉄砲を得たるものは鉄砲打
といひ、鑓を遣ひ得ては鑓つかひといひ、長刀をおぼへては長刀つかひ

といふ。然るに於ては、太刀の道を覚へたるものを太刀つかひ、脇差つ
かひといはん事也。

弓・鉄砲・長刀、皆是武家の道具なれば、いづれも兵法の道也。然れ
ども、太刀よりして兵法といふ事、道理也。太刀の徳よりして世を納め、
身を納むる事なれば、太刀は兵法のおこる所也。太刀の徳を得ては、一
人して十人に勝つ事也。一人にして十人に勝つなれば、百人にして千人
に勝ち、千人にして万人に勝つ。

然るによつて、我が一流の兵法に、一人も万人も同じ事にして、武士
の法を残らず兵法と云ふ所也。道に於て、儒者・仏者・数寄者・しつけ
者・乱舞者・此等の事は武士の道にはなし。其道にあらざるといふとも、
道を広く知れば、物毎に出あふ事也。いづれも人間におみて、我道、我
道を能くみがく事肝要也。

一、兵法に武具の利を知ると云ふ事

武道具の利をわきまゆるに、何れの道具にても、折にふれ、時にした
がい、出合ふもの也。脇差は座のせばき所、敵の身ぎわへによりて其利
おほし。太刀は何れの所にても大形出合ひて利あり。長刀は戦場にては
鑓におとる心あり。鑓は先手なり、長刀は後手也。同じ位のまなびにし
ては、鑓は少しつよし。鑓・長刀も事により、つまりたる所にては其利
すくなし。取籠り者などにも然るべからず。

只戦場の道具なるべし。合戦の場にしては肝要の道具也。され共、座
敷にての利を覚へ、細やかに思ひ、実の道を忘るゝに於ては、出合ひが
たかるべし。弓は合戦の場にて、かけひきにも出合ひ、鑓わき、其外、物
きわ、物ぎわにて、はやく取合はするものなれば、野相の合戦などにと
りわきよき物也。城せめなど、又敵相二十間をこへては不足なる物也。

当世に於ては、弓は申すに及ばず、諸芸花多くして実すくなし。、さや
うの芸能は、肝要の時、役に立ちがたし。其利少なし。城郭の内にして
は鉄砲にしく事なし。野相などにも、合戦のはじまらぬ内には、其利
多し。戦はじまりては不足なるべし。弓の一つの徳は、放つ矢、人の目

に見えてよし。鉄炮の玉は、目に見えざる所、不足也。

此儀能々吟味有るべき事。馬の事、強くこたへて癖なき事肝要也。惣而武道具につけ、馬も大形にありき、刀・脇差も大形に切れ、鎧・長刀も大形にとをり、弓・鉄炮も強く、そこねざるやうに有るべし。道具以下にも、かたわけてすぐ事あるべからず。余りたる事は足らぬと同じ事也。人真似をせず共、我身に随ひ、武道具は手にあふやうに有るべし。将卒共に物に好き、物を嫌ふ事悪し。工夫肝要也。

一、兵法の拍子の事

物毎に付け、拍子は有る物なれども、とりわき兵法の拍子、鍛錬なくては及びがたき所也。世の中の拍子あらはれてある事、乱舞の道、伶人管弦の拍子など、是皆能くあふ所のろくなる拍子也。武芸の道にわたつて、弓を射・鉄炮を放ち、馬に乗る事までも、拍子・調子あり。諸芸・諸能に至りても、拍子を背く事は有るべからず。

又空成る事に於ても拍子あり。武士の身の上にして、奉公に、身をいあぐる拍子、しさぐる拍子、筈のあふ拍子、筈のちがふ拍子あり。或は商の道、分限に成る拍子、分限にてもそのたゆる拍子、道々に付けて拍子の相違有る事也。物毎のさかゆる拍子、衰ふる拍子、能々分別すべし。兵法の拍子に於て様々有る事也。

先づあふ拍子をしつて、違う拍子をわきまへ、大小・遅速の拍子の中にも、当る拍子をしり、間の拍子をしり、背く拍子をしる事、兵法の専也。此背く拍子わきまへ得ずしては、兵法確かならざる事也。兵法の戦に、其敵々々の拍子をしり、敵の思ひよらざる拍子をもつて、空の拍子を智恵の拍子より発して勝つ所也。何れの巻にも、拍子の事を専ら書記す也。其書付の吟味をして、能々鍛錬有るべき物也。

右一流の兵法の道、朝な朝な、夕な夕な、勤め行ふによつて、おのづから広き心になつて、多分一分の兵法として、世に伝ふる所、初めて書頭す事、地水火風空、是五巻也。我兵法を学ばんと思ふ人は、道を行ふ法あり。

第一に、よこしまなき事を思ふ所

第二に、道の鍛錬する所

第三に、諸芸にさはる所

第四に、諸職の道を知る事

第五に、物毎の損得をわきまゆる事

第六に、諸事自利を仕覚ゆる事

第七に、目に見えぬ所をさとつてしる事

第八に、僅かなる事にも気を付くる事

第九に、役にたたぬ事をせざる事

大形、此の如き理を心にかけて、兵法の道鍛錬すべき也。此道に限りて、直なる所を広く見たてざれば、兵法の達者とは成りがたし。此法を学び得ては、一身にして、二十三十の敵にも負くべき道にあらず。先ず氣に兵法をたえさず、直なる道を勤めては、手にて打勝ち、目に見る事も人に勝ち、又鍛錬をもつて惣躰自由なれば、身にも人に勝ち、又此道に慣れたる心なれば、心をもつても人に勝ち、

此所に至りては、いかにとして人に負くる道あらんや。又大きな兵法にしては、善人を持つ事に勝ち、人数をつかふ事に勝ち、身を正しく行ふ道に勝ち、国を治むる事に勝ち、民を養ふ事に勝ち、世の例法を行なひ勝ち、何れの道におもても、人に負けざる所を知りて、身を助け、名を助くる所、是兵法の道也。

正保二歳五月十二日

新免武蔵

寺尾孫丞殿

寛文七年二月五日

寺尾夢世勝延（花押）

山本源介殿

水之巻

兵法二天一流の心、水を本として、利方の法を行ふによつて水の巻として、一流の太刀筋、此書に書顯すもの也。此道何れも細やかに心の儘には書きわけがたし。縦ひことばは続かざると云ふとも、利は自から聞ゆべし。

此書に書付けたる所、一こと一こと、一字々々にて思案すべし。大形に思ひては、道のちがふ事多かるべし。兵法の利におゐて、一人と一人との勝負のやうに書付けたる所なりとも、万人と万人との合戦の利に心得、大ぎに見たつる所肝要也。此道に限つて、少しなりとも、道を見違へ、道の迷ひありては、悪道に落つる者也。此書付けばかりを見て、兵法の道には及ぶ事にあらず。

此書に書付けたるを、我身にとつて書付くを、見ると思はず習ふと思はず、匱物にせずして、則ち我心より見出したる利にして、常に其身になつて、能々工夫すべし。

一、兵法心持の事

兵法の道におゐて、心の持やうは、常の心に替る事なかれ。常にも、兵法の時に、少しもかはらずして、心を広く直にして、きつくひつぱらず、少しもたるまず、心のかたよらぬやうに、心を直中に置きて、心を静にゆるがせて、其ゆるぎの刹那も、ゆるぎやまぬやうに、能々吟味すべし。

静なるときも心は静かならず、何とはやき時も心は少しもはやからず、心は躰につれず、躰は心につれず、心に用心して、身には用心をせず、心の足らぬ事なくして、心を少しも余らせず、うへの心はよわくとも、その心をつよく、心を人に見分けられざるやうにして、少身なるものは心に大きな事を残らず知り、大身なるものは心にちいさき事を能く知りて、大身も小身も、心を直にして、我身のひいきをせざるやうに心

を持つ事肝要也。心のうち濁らず、広くして、ひろき所へ智慧を置べき也。智慧も心もひたとみがく事専也。

智慧をとき、天下の利非をわきまへ、物事の善悪を知り、よろづの芸能、其道々々をわたり、世間の人に少しもだまされざるやうにして後、兵法の智慧となる心也。兵法の智慧におゐて、取りわきちがふ事有るもの也。戦の場万事せわしき時なりとも、兵法の道理を極め、動きなき心、能々吟味すべし。

一、兵法の身なりの事

身のかゝり、顔は俯むかず、仰がず、傾かず、ひずまず、目を見出さず、顔に皺をよせず、眉間に皺をよせて、目の玉動かざるやうにして、瞬きをせぬやうに思ひて、目を少しすくめるやうにして、うらやかに見ゆる顔、鼻すじ直にして、少しおとがいを出す心なり。

首は後ろの筋を直に、うなじに力を入れて、肩より惣身はひとしく覚へ、両の肩をさげ、脊筋をろくに、尻を出さず、膝より足先まで力を入れて、腰の屈まざるやうに腹をはり、楔をしむると云ひて、脇差の鞘に腹を持たせて、帯のくつろがざるやうに、楔をしむると云ふ教へあり。惣而兵法の身におゐて、常の身を兵法の身とし、兵法の身を常の身とする事肝要也。能々吟味すべし。

一、兵法の目付と云ふ事

眼の付けやうは、大きに広く付くる目也。観見の二つの事、観の目つよく、見の目よはく、遠き所を近く見、近き所を遠く見る事、兵法の専也。敵の太刀を知り、聊かも敵の太刀を見ずと云ふ事、兵法の大事也。工夫有るべし。此目付、小さき兵法にも、大きな兵法にも、同じ事也。目の玉動かずして、両脇を見る事肝要也。かやうの事、急がしき時、俄にわきまへがたし。此書付を覚へ、常住此目付になりて、何事にも目付のかはらざる所、能々吟味有べきもの也。

一、太刀の持ちやうの事

太刀の取りやうは、大指・人さし指を浮ける心にもち、たけ高指しめずゆるまず、薬指・小指をしむる心にして持つ也。手の内にはくつろぎの有る事悪しし。

敵をきるものなりと思ひて、太刀を取るべし。敵をきる時も、手の内にかわりなく、手のすくまざるやうに持つべし。もし敵の太刀をはる事、受くる事、あたる事、おさゆる事ありとも、大指・人さし指ばかりを、少し替る心にして、とにも角にも、きると思ひて、太刀を取るべし。

試しものなどきる時の手の内も、兵法にしてきる時の手の内も、人をきると云ふ手の内に替る事なし。惣而、太刀にても、手にても、いつくと云ふ事を嫌ふ。いつくは、死ぬる手也。いつかざるは、生きる手也。能々心得べきもの也。

一、足づかいの事

足のはこびやうの事、爪先を少しうけて、踵を強く踏むべし。足使いは、ことによりて大小・遅速はありとも、常にあゆむが如し。足に飛足・浮足、ふみすゆる足とて、是三つ、嫌ふ足也。此道の大事にいはいく、陰陽の足と云ふ、是肝心也。

陰陽の足とは、片足ばかり動かさぬもの也。きる時、引く時、受くる時迄も、陰陽とて、右ひだり右ひだりと踏む足也。返々、片足ふむ事有るべからず。能々吟味すべきもの也。

一、五方の構の事

五方の構は、上段・中段・下段・右の脇に構ゆる事・左の脇に構ゆる事、是五方也。構五つにわかつと云へども、皆人をきらん為也。構へ五つより外はなし。何れの構へなりとも、構ゆると思はず、きる事なりと思ふべし。

構の大小はことにより利にしたがふべし。上・中・下は躰の構也。両脇はゆうの構なり。右ひだりの構、上のつまりて、脇一方つまりたる所などにての構也。右ひだりは所によりて分別有り。此道の大事に曰く、構のきわまりは中段と心得べし。中段、構への本意也。兵法大きにして見よ。中段は大将の座也。大将につき、あと四段の構也。能々吟味すべし。

一、太刀の道と云ふ事

太刀の道を知ると云ふは、常に我が差す刀を指二つにて振るときも、道すじ能く知りては自由に振るもの也。太刀をはやく振らんとするによつて、太刀の道さかいて振りがたし。太刀はふりよき程に静に振る心也。或は扇、或は小刀など使ふやうに、はやく振らんと思ふによつて、太刀の道ちかいて振りがたし。

其れは小刀きざみと云ひて、太刀にては人の切れざるもの也。太刀をうちさげてはあげよき道へあげ、横にふりては、横にもどりよき道へもどし、如何にも大きにひじをのべて、強くふる事、是太刀の道也。我が兵法の五つの表をつかひ覚ゆれば、太刀の道定りて、振りよき所也。能々鍛錬すべし。

一、五つのおもての次第、第一の事

第一の構、中段。太刀先を敵の顔へ付けて、敵に行相ふ時、敵太刀打ちかくる時、右へ太刀をはづして乗り、又敵打ちかくる時、切先返しにて打ち、打ちおとしたる太刀、其の儘置き、又敵の打ちかくる時、下より敵の手はる、是第一也。惣別、此五つの表、書付くるばかりにては、合点成なりがたし。

五つの表の分は、手にとつて、太刀の道稽古する所也。此五つの太刀筋にて、我が太刀の道をも知り、如何やうにも、敵の打つ太刀知る所也。是二刀の太刀の構、五つより外にあらざると知らする所也。鍛錬すべき也。

一、おもての第二の次第の事

第二の太刀、上段に構へ、敵打ちかくる所、一度に敵を打つ也。敵を打ちはずしたる太刀、其儘おきて、又敵のうつ所を、下より掬ひ上げて打つ、今一つ打つも同じ事也。此おもての内におもては、様々の心持、色々の拍子、此おもての内をもつて、一流の鍛錬をすれば、五つの太刀の道こまやかに知つて、如何やうにも勝つ所あり。稽古すべき也。

一、おもて第三の次第の事

第三の構、太刀を下段に持ち、ひつさげたる心にして、敵の打ちかくる所を、下より手を張る也。手を張る所を、亦敵、張る太刀を打ち落さんとする所を、こす拍子にて、敵打ちたる後、二の腕を横にきる心也。下段にて敵の打つ所を一度に打ちとむる事也。下段の構、道をはこぶには、やき時も遅き時も、出合ふもの也。太刀をとつて鍛錬あるべき也。

一、おもて第四の次第の事

第四の構、左の脇に横に構へて、敵の打ちかくる手を下より張るべし、下より張るを、敵打ち落さんとするを、手を張る心にて、其儘太刀の道を受け、我が肩の上へ筋かひにきるべし。是太刀の道也。又敵の打ちかくる時も、太刀の道を受けて勝つ也。能々吟味あるべし。

一、おもて第五の次第の事

第五の次第、太刀の構、我右の脇に横に構へて、敵打ちかくる所のくらいを受け、我太刀下の横よりすじかへて、上段に振上げ、上より直にきるべし。是も太刀の道、能くしらため也。此おもてにて、振つけぬれば、重き太刀自由にふるる所也。此五のおもてにおもて、細かに書付くる事にあらず。

我家の一通太刀の道を知り、亦大形拍子をも覚へ、敵の太刀を見わくる事、先づ此五つにて、不断手をからす所也。敵と戦いのうちにも、此太刀筋をからして、敵の心を受け、色々の拍子にて、如何やうにも勝つ所也。能々分別すべし。

一、有構無構のおしへの事

有構無構と云ふは、太刀を構ゆるといふ事あるべき事にあらず。されども、五方に置く事あれば、構へともなるべし。太刀は、敵の縁により、所により、けいきに随ひ、何れの方に置きたりとも、其敵きりよきやうに持つ心也。上段も時に随ひ、少し下る心なれば中段となり、中段もを利により少しあぐれば上段となる。

下段も折にふれ、少しあぐれば中段となる。両脇の構、も位により少し中へ出せば、中段・下段共なる心也。然るによつて、構はありて構はなきといふ利也。先づ太刀を取つては、何れにしてなりとも、敵をきるると云ふ心也。若し敵のきる太刀を受くる、張る、当る、ねばる、さはるなど云ふ事あれども、みな敵を切る縁なりと心得べし。受くると思ひ、張ると思ひ、当ると思ひ、ねばると思ひ、さはると思ふによつて、きる事不足なるべし。

何事もきる縁と思ふ事肝要也。能々吟味すべし。兵法大きにして、人数だてと云ふも構也。みな合戦に勝つ縁なり。いつくといふ事悪しし。能々工夫すべし。

一、敵を打つに、一拍子の打の事

敵を打つ拍子に、一拍子と云ひて、敵我あたるほどの位を得て、敵のわきまへぬうちを心に得て、我身もうごかさず、心も付けず、如何にもはやく、直に打つ拍子也。敵の太刀、ひかん、はずさん、うたんと思ふ心のなきうちを打つ拍子、是一拍子也。此拍子能く習ひ得て、間の拍子をはやく打つ事鍛錬すべし。

一、二のこしの拍子の事

二のこしの拍子、我打ちださとする時、敵はやく引き、はやく張りのくるやうなる時は、我打つと見せて、敵の張りてたるむ処を打ち、引きてたるむ所を打つ、是二のこしの打也。此書付斗にては、なかなか打得がたかるべし。教へ受けては、忽ち合点のゆく所也。

一、無念無想の打ちと云ふ事

敵も打ちださんとし、我も打ちださんと思ふ時、身も打つ身になり、心もうつ心になつて、手は何時となく空より後ばやにつよく打つ事、は無念無想とて、一大事の打ち也。此打度々出合ふ打ち也。能々習ひ得て鍛錬あるべき儀也。

一、流水の打と云ふ事

流水の打ちと云ひて、敵相になりて競合ふ時、敵はやひかん、はやくはづさん、早く太刀をはりのけんとする時、我身も心も大きになつて、太刀を我身の後より、如何程もゆるゆると、よどみの有やうに、大きにつよく打つ事也。此打ち、習ひ得ては、慥に打ちよきもの也。敵の位を見分くること肝要也。

一、縁のあたりと云ふ事

我打ち出す時、敵打ちとめん、はりのけんとする時、我打ち一つにし、あたまをも打ち、手をも打ち、足をも打つ。太刀の道一つをもつて、何れなりとも打つ所、是縁の打ち也。此打ち、能く打ちならひ、何時も出合ふ打ち也。細く打ちあひて分別あるべき事也。

一、石火のあたりと云ふ事

石火のあたりは、敵の太刀と我太刀と付合ふほどにて、我太刀少しも上げずして、如何にも強く打つ也。是は足もつよく、身もつよく、手もつよく、三所をもつてはやく打つべき也。此打ち、度々打ち習はずしては打ちがたし。よく鍛錬すれば、つよくあたるもの也。

一、紅葉の打ちと云ふ事

紅葉の打ち、敵の太刀を打ち落し、太刀取りなをす心也。敵前に太刀を構へ、打たん、はらん、受けんと思ふ時、我打つ心は、無念無想の打ち、又石火の打ちにても、敵の太刀を強く打ち、その儘あとをねばる心にて、切先さがりに打てば、敵の太刀必ず落つるもの也。此打ち鍛錬すれば、打ち落とす事やすし。能々稽古あるべし。

一、太刀にかはる身と云ふ事

身にかはる太刀とも云ふべし。惣而、敵を打つに、太刀も身も、一度には打たざるもの也。敵の打つ縁により、身をば先へ打つ身になり、太刀は身にかまはず打つ所也。若くは、身は揺るがず、太刀にて打つ事はあれども、大形は身を先へ打ち、太刀を後より打つもの也。能々吟味して打ち習ふべき也。

一、打とあたると云ふ事

打と云ふ事、あたると云ふ事、二つ也。打つと云ふ心は、何れの打ちにても、思ひつけて慥に打つ也。あたるはゆきあたる程の心にて、強くあたり、忽ち敵の死ぬる程にても、是はあたる也。打つと云ふは、心得て打つ所也。吟味すべし。敵の手にても足にても、あたると云ふは先づあたる也。あたりて後を、強く打たため也。あたるはさわる程の心、

能く習ひ得ては、各別の事也。工夫すべし。

一、しゅうこうの身と云ふ事

秋猴の身とは、手を出さぬ心なり。敵へ入身になりて少しも手を出さず心なく、敵打つ前、身をはやく入る心也。手を出さんと思へば、必ず身の遠のくものなるによつて、惣身をはやくうつり入る心也。手にてうけ合はする程の間には、身も入りやすきもの也。能々吟味すべし。

一、しつかうの入身と云ふ事

漆膠とは、入身に能く付きてはなれぬ心也。敵の身に入る時、かしらをもつけ、身をもつけ、足をもつけ、つよくつく所也。人毎に顔足ははやくいれども、身のくもの也。敵の身へ我身をよくつけ、少しも身のあいのなきやうにつくもの也。能々吟味有べし。

一、たけくらべと云ふ事

たけくらべと云ふは、いづれにても敵へ入込む時、我身の縮まざるやうにして、足をものべ、腰をものべ、首をものべて、強く入り、敵の顔と顔とならべ、身のたけをくらぶるに、くらべかつと思ふほど、丈高くなつて、つよく入る所、肝心也。能々工夫有るべし。

一、ねばりをかくると云ふ事

敵も打ちかけ、我も太刀を打ちかくるに、敵うつくる時、我太刀敵の太刀に付けて、ねばる心にして入る也。ねばるは、太刀はなれがたき心、あまり強くなき心に入べし。敵の太刀に付けて、ねばりをかけ入る時は、いか程も静かに入りても苦しからず。ねばると云ふ事と、もつるゝと云ふ事、ねばるはつよし、もつるゝはよはし。此事分別有るべし。

一、身のあたりと云ふ事

身のあたりは、敵のきわへ入りこみて、身に敵にあたる心也。少し我顔をそばめ、我左の肩を出し、敵のむねにあたる也。あたる事、我身をいかほどもつよくなりあたる事、いきあふ拍子にて、はづむ心に入るべし。此入る事、入り習ひ得ては、敵二間も三間もはげのくほど、強きもの也。敵死入るほどもあたる也。能々鍛錬あるべし。

一、三つのうけの事

三つのうけと云ふは、敵へ入りこむ時、敵打ち出す太刀をうくるに、我太刀にて敵の目を突くやうにして、敵の太刀を我右のかたへ引きながしてうくる事、亦つきうけと云ひて、敵打つ太刀を、敵の右の目を突くやうにして、首をはさむ心につきかけてうくる所、又敵の打つ時、短き太刀にて入るに、うくる太刀はさのみかまはず、我左の手にて、敵のつらを突くやうにして入りこむ、是三つのうけ也。左の手をにぎりて、こぶしにて面を突くやうに思ふべし。能々鍛錬有るべきもの也。

一、おもてをさすと云ふ事

面をさすと云ふは、敵太刀相になりて、敵の太刀の間、我太刀の間に、敵の顔を我太刀先にてつく心に、常に思ふ所肝心也。敵の顔をつく心あれば、敵の顔、身も、のるもの也。敵をのらするやうにしては、色々勝つ所の利あり。能々工夫すべし。戦の内に、敵の身のる心ありては、はや勝つ所也。それによつて、面をさすと云ふ事、忘るべからず、古の内に此利、鍛錬あるべきもの也。

一、心をさすと云ふ事

心をさすと云ふは、戦のうちにて、うへつまり、脇つまりたる所などに、きる事いずれもなりがたき時、敵をつく事、敵の打つ太刀をはづす心は、我太刀のむねを直に敵に見せて、太刀さきゆがまざるやうに引きとりて、敵のむねをつく事也。若し我くたびれたる時か、亦是刀のきれざる時などに、此儀専らもちゆる心なり。能々分別すべし。

一、喝咄と云ふ事

喝咄と云ふは、何れも、我打ちかけ、敵をおつこむ時、敵また打ちかへすやうなる時、したより敵を突くやうにあげて、かへしにて打つ事、何れもはやく拍子を以て、喝咄と打ち、喝とつきあげ、咄と打つ心也。此拍子、何時も打ちあいの内には、専ら出合ふ事也。喝咄のしやう、きつさきあぐる心にして、敵を突くと思ひ、あぐると一度に打拍子、能く稽古して吟味あるべき事也。

一、はりうけと云ふ事

はりうけと云ふは、敵と打合時、とたんとたんと云ふ拍子になるに、敵の打つ所を、我太刀にてはり合はせ打つ也。はり合はする心は、さのみきつくはるにあらず、亦うくるにあらず。敵の打つ太刀に応じて、打つ太刀をはりて、はるよりはやく敵を打つ事也。はるにて先をとり、打つにて先をとる所肝要也。はる拍子能く合へば、敵何と強く打ちても、少しはる心あれば、太刀先の落つることにあらず。能く習ひ得て吟味有るべし。

一、多敵のくらしいの事

多敵のくらゐと云ふは、一身にして大勢とたゝかふ時の事也。我が刀脇差をぬきて、左右へひろく、太刀を横に捨て構ゆる也。敵は四方よりかゝるとも、一方へ追ひ廻す心也。敵かゝるくらしい、前後を見わけて、先

へ進むものに、はやく行合ひ、大きに目をつけて、敵打出すくらしいを得て、右の太刀も左の太刀も、一度にふりちがへて、て前待つ事悪しし。

はやく両脇の位に構へ、敵の出でたる所を、つよくきりこみ、おつくづつして、其儘又た敵の出でたる方へかゝり、ふりくづす心也。如何にもして、敵をひとへにうをつなぎに追ひなす心にしかけて、敵のかさなるを見へば、其儘間をすかさず、強くはらいこむべし。敵あひこむ所、ひたと追ひ廻はしぬれば、はかのゆきがたし。又敵の出づるかたかたと思へば、待つ心ありて、はかゆきがたし。

敵の拍子を受けて、くづるゝ所を知り、勝つ事也。を折々あひ手を余多よせ、おいこみつけて、其心を得れば、一人の敵も、十、二十人の敵も、心安き事也。能く稽古して吟味有るべき也。

一、打ちあひの利の事

此打ちあひの利と云ふ事にて、兵法、太刀にての勝利をわきまゆる所也。こまやかに書きしるすにあらず。能く稽古ありて、勝つ所をしるべきもの也。大形兵法の道の道を頭はず太刀也。口伝。

一、一つの打ちと云ふ事

此一つの打ちと云ふ心をもつて、慥に勝つ所を得る事也。兵法能くまなばざれば、心得がたし。此儀能く鍛錬すれば、兵法心の儘になつて、思ふ儘に勝つ道也。能々稽古すべし。

一、直通のくらしいといふ事

直通の心、二刀一流の道の道をつけて、伝ゆる所也。能々鍛錬して、此兵法に身をなす事肝要也。口伝。右書付くる所、一流の剣術、大形此巻に記し置く事也。兵法、太刀を取りて、人に勝つ所を覚ゆるは、先づ五つのおもてを以て五方の構を知り、太刀の道を覚へて惣躰自由になり、

心のきゝ出でて道の拍子をしり、おのれと太刀も手さへて、身も足も心の儘にほどけたる時に随ひ、一人に勝ち、二人に勝ち、兵法の善悪を知る程になり、此一書の内を、一ヶ条一ヶ条と稽古して、敵と戦ひ、次第、次第に道の利を得て、絶えず心に懸け、急ぐ心なくして、折々手にふれては徳を覚へ、何れの人とも打ちあひ、其心をしつて、千里の道もひと足宛はこぶなり。

緩々と思ひ、此法を行ふ事、武士のなりと心得て、けふははきのふの我に勝ち、あすは下手に勝ち、後は上手に勝つと思ひ、此書物のごとくにして、少しも脇の道へ心のゆかざるやうに思ふべし。縦ひ何程の敵に打ち勝ちても、習ひに背く事におゐては、実の道には有るべからず。此利心にうかびては、一身を以て数十人にも勝つ心のわきまへ有るべし。然る上は、剣術の智力にて、大分一分の兵法をも得道すべし。千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす。能々吟味有るべきもの也。

正保二年五月十二日

新免武蔵

寺尾孫丞殿

火之巻

序

二刀一流の兵法、戦の事を、火に思ひとつて、戦、勝負の事を火の巻として、此に書頭す也。先づ世間の人毎に、兵法の利を小さく思ひなし、或は指先にて手首五寸三寸の利をしり、或は扇をとつて肱より先の先後の勝ちをわきまへ、又は竹刀などにて僅かのはやし利を覚へ、手をきかせ習ひ、足をきかせ習ひ、少しの利のはやし利を専とする事也。我兵法におもて、数度の勝負に一命をかけて打合ひ、生死二つの利をわけ、刀の道を覚へ、敵の打つ太刀の強弱を知り、刀のはむねの道をわきまへ、敵を打果す所の鍛錬を得るに、小さき事、弱き事、思ひよらざる所也。

殊に六具固めてなどの利に、小さき事思ひ出づることにあらず。更には命をばかりの打あひにおもて、一人して五人、十人とも戦ひ、其勝つ道を慥に知る事、我道の兵法也。然るによつて一人して十人に勝ち、千人を以て万人に勝つ道理、何の差別あらんや。能々吟味有るべし。

さりながら常々の稽古の時、千人万人を集め、此道し習ふ事、成る事にあらず。独り太刀をとつても、其敵々の智略をはかり、敵の強弱、手たてを知り、兵法の智徳を以て万人に勝つ所を極め、此道の達者と成り、我兵法の直道、世界におもて誰か得ん、又何れか極めんと慥に思ひ取つて、朝鍛夕練して、みがきおほせて後、独り自由を得、おのづから奇特を得、通力不思議有る所、是れ兵として法を行ふ息成り。

一、場の次第と云ふ事

場のくらいを見わくる所、場におもて日をおふと云ふ事有り、日をつしるになしてかまゆる也。若し所により、日をつしるにする事ならざる時は、右の脇へ日をなすやうにすべし。座敷にても、あかりをつしる、右脇となす事同前也。つしるの場つまらざるやうに、左の場をくつらば、

右の脇の場をつめて構へたき事也。

夜るにても敵の見ゆる所にては、火をつしるにおい、あかりを右脇にする事、同前と心得てかまゆべきもの也。敵をみおろすと云ひて、少しも高き所にかまゆるやうに心得べし。座敷にては上座を高き所と思ふべし。切戦になりて、敵を追廻す事、我左の方へ追廻す心、難所を敵のうしろにさせ、何れにても難所へ追掛くる事肝要也。

難所にて、敵に場を見せずと云ひて、敵に顔をふらせず、油断なくせりつむる心也。座敷にても、敷居・鴨居・戸障子・椽など、亦柱などの方へ追詰むるにても、場を見せずと云ふこと同前也。何れも敵を追懸く方、足場のわるき所、亦是脇にかまいの有る所、何れも場の得を用ゐて、場の勝ちを得るといふ心專にして、能々吟味し鍛錬有るべきもの也。

一、三つの先と云ふ事

三つの先、一つは我方より敵へ掛るせん、けん先の先と云ふ也。亦一つは敵より我方にかゝる時の先、是はたいの先と云ふ也。又一つは我もかゝり、敵もかゝりあふ時の先、躰々の先と云ふ。是三つの先也。何れの戦初めにも、此三つの先より外はなし。先の次第を以て、はや勝つ事を得る物なれば、先と云ふ事、兵法の第一也。此先の仔細様々ありといへども、其時の理を先とし、敵の心を見、我兵法の智恵を以て勝つ事なれば、細やかに書きわくる事にあらず。

第一懸の先、我がゝらんと思ふ時、静にして居り、俄かにはやくかゝる先、うへを強くはやくし、底を残す心の先、又我心を如何に強くして、足は常の足に少しはやく、敵のきわへ寄るとはやくもみたる先、亦心をはなつて、初中後、同じ事に敵をひしぐ心にて、底迄つよき心に勝つ、是れ何れも懸の先也。

第二、待の先、敵我方へかゝりくる時、少しもかまわず、弱きやうに見せて、敵ちかくなつて、づんとつよくなれて、飛付くやうに見せて、敵のたるみを見て、直につよく勝つ事、これ一つの先、又敵かゝり来る時、我も猶つよくなつて出る時、敵のかゝる拍子のかはる間をつけ、其

儘勝ちを得る事、是待の先の理也。

第三、躰々の先、敵はやくかゝるには、我静かにつよくかゝり、敵近くなつて、づんと思ひ切る身にして、敵のゆとりの見ゆる時、直につよく勝つ、又敵静にかゝる時、我身つきやかに、少しはやくかゝりて、敵近くなりて、ひとみもみ、敵の色に随ひ、つよく勝つ事、是躰々の先也。此儀濃やかに書分けがたし。此書付を以て、大形工夫有るべし。此の三つの先、時にしたがひ理に随ひ、何時にても、我方よりかゝる事にはあらざるものなれども、同じくは我方よりかゝりて、敵をまはし度たき事也。いづれも先の事、兵法の智力を以て、必ず勝つ事を得る心、能々鍛錬あるべし。

一、枕をおさゆると云ふ事

枕をおさゆるとは、かしらをあげさせずと云ふ心也。兵法勝負の道にかぎつて、人に我身をまわされてあとにつく事悪し。いかにもして敵を自由にまわし度き事なり。然るによつて、敵もさやうに思ひ、我も其心あれども、人のする事をうけがはずしては叶ひがたし。

兵法に、敵の打つ所をとめ、つく所を抑へ、くむ所をもぎはなしなどする事也。枕をおさゆると云ふは、我が実の道を得て敵にかゝりあふ時、敵何事にも思ふきざしを、敵のせぬ内に見知りて、敵のうつと云ふ、うつの字のかしらをおさへて、跡をさせざる心、是枕をおさゆる心也。たとへば、敵のかゝると云ふ、かの字をおさへ、とぶと云ふ、との字の頭をおさへ、きると云ふ、きの字のかしらをおさゆる、みな以て同じ心也。敵我にわざをなす事に付けて、役に立たざる事をば敵に任せ、役に立つほどの事をばおさへて、敵にさせぬやうにする所、兵法の専也。

是も敵のする事を、おさゑん、おさゑんとする心、後手也。先づ我は何事にても道に任せてわざをなすうちに、敵もわざをせんと思ふかしらのおおさへて、何事も役にたゝせず、敵をこなす所、是兵法の達者、鍛錬の故也。枕をおさゆる事、能々吟味有べき也。

一、渡を越すと云ふ事

渡を越すと云ふは、縦へば、海を渡るに瀬戸と云ふ所もあり、亦是四十里、五十里と云ふ長き海を越すを渡と云ふ也。人間の世を渡るにも、一代の内には、度を越すと云ふ所多かるべし。船路にして、其との所を知り、船の位を知り、日なみを能く知りて、或はひらきの風にたより、或は追風をも受け、若し風変りても、二里、三里は櫓櫂を以て、港につくと心得て、船を乗りとり、渡を越す所也。其心を得て、人の世を渡るにも、一大事にかけて渡を越すと思ふ心あるべし。

兵法、戦の内にも、度を越す事肝要也。敵の位を受け、我が身の達者を覚へ、其理を以て度を越す事と、よき船頭の海路を越すと同じ。渡を越しては亦心やすき所也。渡を越すと云ふ事、敵によわみをつけ、我身も先になりて、大形はや勝つ所也。大小の兵法のうへにも、度を越すと云ふ心肝要也。能々吟味あるべし。

一、景氣を知ると云ふ事

景氣を見ると云ふは、大分の兵法にしては、敵の栄え衰へを知り、相手の人数の心を知り、其場の位を受け、敵の景氣を能く見つけ、我人数何としかけ、此兵法の理にて、慥に勝つと云所のみこみて、先の位を知つて戦ふ所也。又一分の兵法も、敵のながれをわきまへ、相手の人柄を見つけ、人の強き弱き所を見つけ、敵の気色にちがふ事をしかけ、敵のめりかりを知り、其間の拍子を知りて、先をしかくる所肝要也。物事の景氣と云ふ事は、我が智力強ければ必ず見ゆる所也。兵法自由の身になりては、敵の心を能く計りて勝つ道多かるべき事也。工夫有るべし。

一、けんをふむと云ふ事

剣をふむと云ふ心は、兵法に専ら用ゐる儀なり。先づ大きな兵法にしては、弓・鉄炮におゐても、敵我方へうちかけ、何事にてもしかくる

時、敵の弓・鉄炮にてもはなしかけて、其後にかゝるによつて、又弓をつがい、又鉄砲に薬をこみて、かゝりこむ時、こみ入がたし。弓・鉄砲にても、敵の放つ内にはやくかゝる心也。

はやくかゝれば、矢もつがいがたし。鉄炮もうち得ざる心也。物毎を敵のしかくると、其儘其理を受けて、敵のする事を踏みつけて勝つ心なり。亦一分の兵法も、敵の打出す太刀のあとへ打てば、とたん、とたんとなりて、はかゆかざる所也。敵の打出す太刀は、足にてふみ付くる心にして、打出す所を勝ち、二度目を敵の打得ざるやうにすべし。

踏むと云ふは、足には限るべからず、身にても踏み、心にても踏み、勿論太刀にて踏み付けて、二のめを敵によくさせざるやうに心得べし。是則ち物毎の先の心也。敵と一度にといひて、行当る心にてはなし、其儘あとに付く心なり。能々吟味有るべし。

一、くづれを知ると云ふ事

崩と云ふ事は、物毎にあるもの也。其家のくづるゝ、身のくずるゝ、敵のくづるゝ事も、時あたりて、拍子ちがひになりてくづるゝ所也。大分の兵法にしても、敵のくづるゝ拍子を得て、其間を抜さぬやう追ひたつる事肝要也。

くづるゝ所の息をぬかしては、たてかへす所あるべし。又一分の兵法にも、戦ふ内に、敵の拍子ちがひてくづれめをつくもの也。其ほどを油断すれば、又たちかへり、新敷なりて、はかゆかざる所也。其くづれめにつき、敵の顔たてんをさざるやうに、慥に追ひかくる所肝要也。追懸くるは直につよき心也。敵たてかへさざるやうに打放すもの也。打放すと云ふ事、能々分別あるべし。はなれざればしだるき心有り。工夫すべきもの也。

一、敵になると云ふ事

敵になると云ふは、我身を敵になり替へて思ふべきと云ふ所也。世中を見るに、盗みなどして家の内へ取籠るやうなるものをも、敵をつよく思ひなすもの也。敵になりて思へば、世中の人を皆相手とし、にげこみて、せんかたなき心なり。取籠るものは雉子也、打ち果たしに入る人は鷹也。

能々工夫あるべし。大きなる兵法にしても、敵をいへば、強く思ひて、大事にかくるもの也。よき人数を持ち、兵法の道理を能く知り、敵に勝つと云ふ所を能くうけては、氣遣すべき道にあらず。一分の兵法も、敵になりて思ふべし。兵法よく心得て、道理つよく、其道達者なるものにあいては、必ず負くと思ふ所也。能々吟味すべし。

一、四手をはなすと云ふ事

四手をはなすとは、敵も我も同じ心に、はりやう心になつては、戦のはかゆかざるもの也。はりやう心になると思はゞ、其儘心をすてゝ別の利にて勝つ事をする也。大分の兵法にしても、四手の心になれば、果敢ゆかず、人のそんずる事也。

はやく心をすてゝ、敵の思はざる利にて勝つ事専也。亦一分の兵法にても、四手になると思はゞ、其儘心をかへて、敵の位を得て、各別替りたる利を以て、勝ちをわかまゆる事肝要也。能々分別すべし。

一、かげを動かすと云ふ事

陰をつごかすと云ふは、敵の心の見えわかぬ時の事也。大分の兵法にしても、何とも敵の位の見わけざる時は、我かたより強くしかくるやうに見せて、敵の手だてを見るもの也。手だてを見ては、各別の利にて勝つ事やすき所也。

亦一分の兵法にしても、敵うしろに太刀を構へ、脇に構へたるやうなる時は、ふつと打たんとすれば、敵思ふ心を太刀に顕す物也。あらはれしるゝにおゐては、其儘利を受けて慥かに勝ち知るべきもの也。油断す

れば、拍子ぬくるもの也。能々吟味あるべし。

一、影をおさゆると云ふ事

影をおさゆると云ふは、敵のかたより仕掛くる心のみへたる時の事なり。大分の兵法にしては、敵のわざをせんとする所を、おさゆると云ひて、我方より其利をおさゆる所を、敵に強く見すれば、強きにおされて、敵の心かはる事也。我も心をちがへて、空なる心より先をしかけて勝つ所也。一分の兵法にしても、敵のおこるつよき氣指を、利の拍子を以て止めさせ、やみたる拍子に我勝利をつけて、先をしかくるもの也。能々工夫有るべし。

一、うつらかすと云ふ事

移らかすと云ふは、物毎にあるもの也。或は眠りなどもうつり、或はあくびなどのうつるもの也。時のうつるもあり。大分の兵法にして、敵うつわきにして、事を急ぐ心の見ゆる時は、少しもそれにかまはざるやうにして、如何にもゆるりとなりて見すれば、敵も我事に受けて、氣ざしたるむ物なり。

其移りたると思ふ時、我方より空の心にして、はやく強くしかけて、かつ利を得るもの也。一分の兵法にしても、我身も心もゆるりとして、敵のたるみの間を受けて、強くはやく先にしかけて勝つ所専也。亦よはすると云ひて、是に似たる事あり。一つは返屈の心、一つはつかつく心、一つは弱く成る心、能々工夫有るべし。

一、むかつかすると云ふ事

むかつかすると云ふは、物毎にあり。一つにはきはどき心、一つには無理なる心、三つには思はざる心、能く吟味有るべし。大分の兵法にして、むかつかする事肝要也。敵の思はざる所へ、いきどぶしくしかけて、

敵の心のきわまらざる内に、我利を以て先をしかけて、勝つ事肝要也。

亦一分の兵法にしても、初めゆるりと見せて、俄につよくかゝり、敵の心のめりかり、働に随ひ、息をぬかさず、其儘利を受けて勝ちをわかまゆる事肝要也。克々吟味有るべし。

一、おびやかすと云ふ事

おびゆると云ふ事、物毎に有る事也。思ひもよらぬ事におびゆる心なり。大分の兵法にしても、敵をおびやかす事、眼前の事にあらず。或は物の声にもおびやかす、或は小を大にしておびやかす、亦かたわきより不斗おびやかす事、はおびゆる所也。其おびゆる拍子を得て、其利を以て勝つべし。

一分の兵法にしても、身を以ておびやかす、太刀を以ておびやかす、声を以ておびやかす、敵の心になき事、与風しかけて、おびゆる所の利を受けて、其儘かちを得る事肝要也。能々吟味あるべし。

一、まぶるゝと云ふ事

まぶるゝと云ふは、敵我手近くなつて、互に強くはりあひて、はかゆかざると見れば、其儘敵とひとつにまぶれあひて、まぶれあひたる其うちに、利を以て勝つ事肝要なり。大分小分の兵法にも、敵我かたわけては、互に心はりあいて、勝ちのつかざる時は、其儘敵にまぶれて、互にわけなくなるやうにして、其うちの徳を得、其うちの勝ちを知りて、つよく勝つ事専也。克々吟味有るべし。

一、かどにさはると云ふ事

角にさはると云ふは、物毎につよき物をおすに、其儘直にはおしこみがたきもの也。大分の兵法にしても、敵の人数を見て、はり出つ強き所の角にあたりて、其利を得べし。角のめるに随ひ、惣てもみなめる心あり。

其める内にも、角々に心得て、勝利を受くる事肝要也。一分の兵法にしても、敵の躰の角にいたみをつけ、其躰少しもよはくなり、崩るゝ躰になりては、勝つ事やすきもの也。此事能々吟味して、勝つ所をわきまゆる事専也。

一、うろめかすと云ふ事

うろめかすと云ふは、敵に慥なる心を持たせざるやうにする所也。大分の兵法にしても、戦の場におゐて、敵の心を計り、我兵法の智力を以て、敵の心をそこ爰となし、兎の斯のと思はせ、おそしはやしと思はせ、敵うろめく心になる拍子を得て、慥に勝つ所を弁ゆる事。

亦一分の兵法にして、我時に当りて、色々のわざをしかけ、或は打つとみせ、或はつくとみせ、又は入り込むと思はせ、敵のうろめく気ざしを得て、自由に勝つ所、是れ戦の専也。能々吟味あるべし。

一、三つの声と云ふ事

三つの声とは、初中後の声と云ひて、三つにかけわくる事也。所により、声をかくると云ふ事専也。声は勢ひなるによつて、火事などにもか、風波にもか、声は勢力を見する也。

大分の兵法にしても、戦より初めにかくる声は、如何ほども嵩をかけたかけて声をかけ、亦戦ふ間の声は、調子をひきく、底より出る声にてかゝり、勝ちて後、跡に大きに強くかくる声、是三つの声也。又一分の兵法にしても、敵を動かさん為、打つと見せて、かしらよりゑいと声をかけ、声の跡より太刀を打出すもの也。

又敵を打ちてあとに声をかくる事、勝ちをしらす声也。是を先後の声と云ふ。太刀と一度に、大きに声をかくる事なし。若し戦の内にかくるは、拍子にのる声、ひきかくる也。能々吟味あるべし。

一、まぎるゝと云ふ事

まぎるゝと云ふは、大分の戦にしては、人数を互にたて合ひ、敵のつよき時、まぎるゝと云ひて、敵の一方へかゝり、敵くづるゝと見ば、捨てゝ、又強き方々へかゝる、大形つゞらおりにかゝる心也。

一分の兵法にして、敵を大勢よするにも、此心専也。方々をかたず、方々にげば、亦つよき方々へかゝり、敵の拍子を得て、よき拍子に左みぎと、つゞらおりの心に思ひて、敵の色を見合ひてかゝるもの也。其敵の位を得、打ちとをるにおゐては、少しも引く心なく、強く勝つ利也。一分入身の時も、敵のつよきには、其心あり。まぎるゝと云ふ事、一足も引く事をしらず、まぎれゆくゝと云ふ心、能々分別すべし。

一、ひしぐと云ふ事

ひしぐと云ふは、縦へば敵を弱く見なして、我強めになつて、ひしぐと云ふ心専大分の兵法にしても、敵小人数のくらいを見こなし、又は大勢也とも、敵うろめきて弱みつく所なれば、ひしぐといひて、かしらよりにかさをかけて、おつぴしぐ心なり。

ひしぐ事弱ければ、もてかへす事あり。手の内に握つてひしぐ心、能々分別すべし。亦一分の兵法の時も、我手に不足のもの、又は敵の拍子違ひ、すさりめになる時、少しもいきをくれず、目を見合せざるやうになし、真直にひしぎつくる事肝要也。能々吟味有べし。

一、さんかいのかわりと云ふ事

山海の心と云ふは、敵、我戦ひのうちに、同じ事を度々する事悪しき所也。同じ事二度は是非に及ばず。三度とするにあらず。敵にわざをしかくるに、一度にてもちいずば、今一つもせきかけて、其利に及ばず、各別替りたる事を、ほつとしかけ、それにもはかゆかすば、亦各別の事をしかくべし。然るによつて、敵山と思はゞ海としかけ、海と思はゞ山

としかくる心、兵法の道也。能々吟味あるべき事也。

一、そこをぬくと云ふ事

底を抜くと云ふは、敵と戦ふに、其道の利を以て、上は勝つと見ゆれ共、心をたへさざるに依て、上にてはまけ、下の心はまけぬ事あり。其儀に於ては我俄に替りたる心になつ、敵の心をたやし、底よりまくる心に敵のなる所、見る事専也。此底をぬく事、太刀にてもぬき、又身にてもぬき、心にてもぬく所有り、一道にはわきまへべからず。底よりくづれたるは、我心残すに及ばず。さなき時は、残す心なり。残す心あれば、敵くづれがたき事也。大分小分の兵法にしても、底をぬく所、能々鍛錬あるべし。

一、あらたになると云ふ事

新に成るとは、敵我戦ふ時、もつるゝ心になつて、はかゆかざる時、我気を振捨てて、物毎を新らしくはじむる心に思ひて、其拍子を受けて勝ちをわきまゆる所也。新に成る事は、何時も敵と我れきしむ心になると思はゞ、其儘心を替へて、各別の利を以て勝つべき也。大分の兵法におもても、新に成ると云ふ所、わきまゆる事肝要也。兵法の智力にては、忽ち見ゆる所也。能々吟味あるべし。

一、そとつこしゆと云ふ事

鼠頭牛首と云ふは、敵と戦のうちに、互に細かなる所を思ひ合はせて、纏るゝ心になる時、兵法の道をつねに鼠頭牛首、そとつこしゆと思ひて、如何にも細かなるうちに、俄に大きな心にして、大小にかわる事、兵法一つの心だて也。平生人の心も、鼠頭牛首と思ふべき所、武士の肝心也。兵法大分小分にしても、此心を離るべからず。此事能々吟味有るべきもの也。

一、しやうそつをしると云ふ事

将卒を知るとは、何れも戦に及ぶ時、我思ふ道に至りては、たえず此法を行ひ、兵法の智力を得て、我敵たるものをば、皆我卒成りと思ひつて、なしたきやうになすべしと心得、敵を自由にまわさんと思ふ所、我は將也、敵は卒なり。工夫あるべし。

一、つかをはなすと云ふ事

つかをはなすと云ふに、色々心ある事也。無刀にて勝つ心あり、又太刀にてかたざる心あり。様々心のゆく所、書付くるあらず。能々鍛錬すべし。

一、いわをのみと云ふ事

岩尾の身と云ふ事、兵法を得道して、忽ち岩尾の如くに成りて、万事あたらざる所、動かざる所、口伝。右書付くる所、一流剣術の場にして、絶えず思ひよる事のみ云ひ顯はし置く物也。今初めて此利を書記す物なれば、あと先とかきまざるゝ心有りて、細やかにはいひわけがたし。

さりながら、此道を学ぶべき人の為めには、心しるしに成るべきもの也。我若年より以来、兵法の道に心をかけて、剣術一通りの事にも手からし、身をかからし、色々様々の心に成り、他の流々をも尋ね見るに、或は口にて云ひかこつけ、或は手にて細かなる業をし、人目に能きやうに見すると云ひても、一つも実の心にあるべからず。

勿論かやうの事しならひても、身をきかせならひ、心をきかせつくる事を思へども、皆是道のやまひとなりて、後々迄も失せがたくして、兵法の直道世にくちて道のすたるもとゐ也。剣術実の道になりて、敵と戦ひ勝つ事、此法聊か替る事有るべからず。我兵法の智力を得て、直なる所を行ふに於ては、勝つ事うたがひ有るべからざるもの也。

正保二年五月十二日

新免武蔵

寺尾孫丞殿

寛文七年二月五日

寺尾夢世勝延(花押)

山本源介殿

風之巻

一、兵法、他流の道を知る事

他の兵法の流々を書付け、風の巻として、此巻に顕す所也。他流の道を知らずしては、我一流の道慥にわかまへえがたし。他の兵法を尋ね見るに、大きな太刀をとつて、強き事を専にして、其わざをなすなかれあり。或は小太刀と云ひて、短き太刀を以て道を勤むるながれもあり。或は太刀かず多くたくみ、太刀の構を以て、表と云ひ、奥として、道を伝ゆる流もあり。是皆、実の道にあらざる事、此巻の奥に、慥かに書顯はし、善悪是非を知らする也。我一流の道理、各別の義也。他の流々芸にわたつて、身すぎの為にして、色をかざり花をさかせ、売物にこしらへたるによつて、実の道にあらざる事か、亦世の中の兵法、剣術ばかりに小さく見たて、太刀を振習ひ、身をきかせて、手のかゝる所を以て、勝つ事をわかまへたるものか。何れも慥かなる道にあらず。他流の不足ある所、一々此書に書顯はず也。能々吟味して、二刀一流の利をわかまゆるべきもの也。

一、他流に大きな太刀を持つ事

他に大きな太刀を好む流あり。我兵法よりして、是を弱き流と見たつる也。其故は、他の兵法、如何様にも人に勝つと云ふ理をば知らずして、太刀の長きを得として、敵相遠き所より勝ちたきと思ふによつて、長き太刀このむ心あるべし。

世中に云ふ、「一寸手まさり」とて、兵法知らぬもの、沙汰也。然るによつて、兵法の利なくして、長きを以て遠くかたんとする、それは心の弱き故なるによつて、弱き兵法と見たつる也。若し敵相近く組みあふほどの時は、太刀長き程打つ事もきかず、太刀のもとをりすくなく、太刀を荷にして、小脇差手振の人に劣るもの也。長き太刀好む身にしては、

其云わけはあるものなれども、それは其身ひとりの理也。

世中の実の道より見る時は、道理なき事也。長き太刀もたずして、短き太刀にては必ず負くべき事か。或は其場により、上、下、脇などのつまりたる所、或は脇差ばかりの座にても、長きを好む心、兵法の疑ひとて、悪しき心也。人により小刀なるものもあり。

昔より、「大は小をかなへる」と云へば、むさと長きを嫌ふにはあらず、長きとかたよる心を嫌ふ儀なり。大分の兵法にして、長き太刀は大人數也、短きは小人数也。小人数と大人數にて合戦はなるまじきものか、少人数にて大人數に勝ちたる例多し。我一流に於て、さやうにかたづきせばき心、嫌ふ事也。能々吟味有るべし。

一、他流におみて、つよみの太刀と云ふ事

太刀に強き太刀、弱き太刀と云ふ事は、有るべからず。つよき心にてふる太刀は、あらかきもの也。あらかきばかりにては勝ちがたし。又強き太刀と云ひて、人をきる時、無理につよくきらんとすれば、きれざる心也。ためし物などにきる心にも、強くきらんとする事悪しし。誰に於ても、かたきときやふに、弱くきらん、強くきらんと思ふものなし。

唯人をきり殺さんと思ふ時は、つよき心もあらず、勿論よわき心にもあらず、敵の死ぬる程と思ふ儀也。若しは、つよみの太刀にて、人の太刀強くはれば、はり余りて、必ず悪しき心なり、人の太刀に強くあたれば、我太刀も折れくたくる所也。然るによつて、つよみの太刀など云ふ事、なき事也。大分の兵法にしても、強き人数を持ち、合戦に於て強くかたんと思へば、敵も強き人を持ち、戦もつよくせんと思ふ、それは何れも同じ事也。

物毎に勝つと云ふ事、道理なくしては勝つ事あたはず。我道に於ては、少しも無理なる事を思はず、兵法の智力をもつて、如何やうにも勝つ所を得る心也。能々工夫有るべし。

一、他流に短き太刀を用ゐる事

短き太刀斗にてかたんと思ふ所、実の道にあらず。昔より太刀、刀と云ひて、長きと短きと云ふ事を躰はし置く也。世の中に強力なるものは、大きな太刀をもちろく振るなれば、無理に短かきを好む所にあらず。その故は、長きを用ゐて、鑓・長太刀を持つ物也。

短き太刀を以て、人の振る太刀の透間をきらん、飛びいらん、つかまなどと思ふ心、かたづきて悪しし。又透間をねろう所、万事後手に見え、纏るゝと云ふ心有りて、嫌う事也。若しは、短き物にて、敵へ入りにくまん、取らんとする事、大敵の中にて役に立たざる心なり。短かきにして得たるものは、大勢をもちきはらん、自由に飛ばん、くるはんと思ふとも、皆受け太刀といふ物になりて、取紛るゝ心有りて、慥かなる道にてはなき事也。

同じくは、我身はつよく直にして、人を追廻し、人に飛びはねさせ、人のうろめくやうにしかけて、慥に勝つ所を専とする道也。大分の兵法に於ても、其理有り。同くば、人数かさを以て、敵を矢場しほし、即時に攻潰す心、兵法の専也。世中、人の物をしならふ事、平生も、受けつ、かはいつ、抜けつ、くぐつ、しならへば、心道に引かされて、人に廻はさるゝ心あり。兵法の道直に糺しき所なれば、正理を以て人を追廻はし、人を随がゆる心肝要也。能々吟味有るべし。

一、他流に太刀かず多き事

太刀の数余多にして、人に伝ゆる事、道を売物にしたてゝ、太刀数多く知りたると、初心のものに深く思はせん為なるべし。兵法に嫌う心也。其故は、人をきる事、色々あると思ふ所、迷ふ心也。世の中に於て、人をきる事、替る道なし。

知るものも、知らざるものも、女童子も、打ち叩ききると云ふ道は、多く無き所也。若しかはりては、つくぞ、なぐぞと云ふ外はなし。先づきる所の道なれば、数の多かるべき子細にあらず。されども、場により、

事に随ひ、上脇などのつまりたる所などにては、太刀のつかえざるやうに持つ道なれば、五法とて五つの数は有るべきもの也。

それより外にとりつけて、手をねじ、身をひねりて、飛び、ひらき、人をきる事、実の道にあらず。人をきるに、ねじてきられず、ひねりてきられず、飛んできられず、ひらいてきられず、かつて役に立たざる事也。我兵法におゐては、身なりも心も直にして、敵をひずませ、ゆがませて、敵の心のねぢひねる所を勝つ事肝要也。能々吟味有るべし。

一、他に、太刀の構を用ゆる事

太刀の構を専にする所、ひが事なり。世の中に構のあらんことは、敵のなき時の事なるべし。其仔細は、昔よりの例、今の世の法などとして、法例をたつる事は、勝負の道には有るべからず。その相手のあしきやうに匠む事なり。

物毎に構と云ふ事は、ゆるがぬ所を用ゐる心なり。或は城を構ゆる、或は陣を構ゆるなどは、人に仕掛けられても、つよく動かぬ心、是常の儀也。兵法勝負の道に於ては、何事も先手先手と心懸くる事也。構ゆると云ふ心は、先手を待つ心也。能々工夫有るべし。兵法勝負の道、人の構をつごかせ、敵の心になき事をしかけ、或は敵をうるめかせ、或はむかつかせ、又はおびやかし、敵のまざるゝ所の拍子の理を受けて、勝つ事なれば、構と云ひ、後手の心を嫌ふ也。

然る故に、我道に有構無構と云ひて、構は有りてかまへはなきと云ふ所也。大分の兵法にも、敵の人数の多少を覚へ、其戦場の所を受け、我人数のくらいを知り、其徳を得て、人数をたて、戦いを始むる事、それ合戦の専也。人に先をしかけられたる時と、我人にしかくる時は、一倍もかはる心也。太刀を能く構へ、敵の太刀を能く受け、能くはると覚ゆるは、鑓・長太刀を持ちて、さくに振りたると同じ。敵を打つ時は、又さく木を抜きて、鑓・長太刀に使ふ程の心也。能々吟味有るべき事也。

一、他流に、目付といふ事

目付と云ひて、其流により、敵の太刀に目を付くるもあり、亦是手に目を付くる流も有り。或は顔に目を付け、或は足などに目を付くるもあり。其の如く、取わけて目を付けむとしては、まぎるゝ心有りて、兵法のやまひと云ふ物になるなり。

其仔細は、鞆をける人は、鞆によく目を付けねども、びんすりをけ、おいまりをしながらしてもけ、まわりてもける事、物になるゝと云ふ所あれば、慥に目に見るに及ばず、又ほつかなどするものゝわざにも、其道になれては、戸びらを鼻にたて、刀をいく腰もたまふなどにとる事、是れ皆慥に目付くるとはなけれども、不断手になれぬれば、おのづから見ゆる所也。兵法の道に於ても、其敵、其の敵と仕馴れ、人の心の軽重を覚へ、道を行ひ得ては、太刀の遠近・遅速迄も、みな見ゆる儀也。

兵法の目付は、大形其人の心に付きたる眼也。大分の兵法に至りても、其敵の人数の位に付きたる眼也。観見二つの見やう、観の目つよくして敵の心を見、其場の位を見、大きに目を付けて、其戦のけいきを見、其折節の強弱を見て、まさしく勝つ事を得る事専也。大小兵法に於て、小さく目を付くる事なし。前にも記すごとく、濃かにちいさく目を付くるによつて、大きな事をとり忘れ、迷ふ心出でて、慥なる勝ちをぬかすもの也。此利、能々吟味して鍛錬有るべきなり。

一、他流に足つかひ有事

足の踏みやうに浮足、飛足、はぬる足、踏みつむる足、からす足などと云ひて、色々さつそくをふむ事有り。是皆、我兵法より見ては、不足に思ふ所也。浮足をきらふ事、其故は、戦になりては、必ず足の浮きたがるものなれば、如何にも慥にふむ道也。又飛足を好まざる事、飛足はとぶをこりありて、飛びていつく心有り。

いく飛も飛ぶと云ふ理の無きによつて、飛足悪しし。亦是ぬる足、はぬると云ふ心にて、はかの行きかぬるもの也。踏つむる足、待の足とて、

殊に嫌ふ事也。其外、からす足、色々さつそくなどあり。或は、沼・ふけ、或は、山川・石原・細道にても、敵ときり合ふものなれば、所により飛びはぬる事もならず、さつそくのふまれざる所有るもの也。我兵法に於て、足に替わる事なし、常の道をあゆむが如し、敵の拍子に随ひ、急ぐ時、静なる時の、身の位を得て、足らず、余らず、足のしどろになきやうに有るべき也。

大分の兵法にしても、足を運ぶ事肝要也。其故は、敵の心を知らず、むさとはやくかゝれば、拍子ちがい、勝ちがたきもの也。又足ぶみ静かにては、敵うるめき有りてくづるゝと云ふ所を見付けずして、勝つ事をぬかして、はやく勝負つけ得ざるもの也。うるめきくづるゝ場を見わけて、少しも敵をくづるがせざるやうに勝つ事肝要也。能々鍛錬あるべし。

一、他の兵法にはやきを用ゐる事

兵法のはやきと云ふ所、実の道にあらず。はやきと云ふ事は、物毎に拍子の間にあはざるによつてはやき遅きと云ふ心也。其道上手になりては、はやく見へざる物也。縦へば、人にはや道と云ひて、四十里、五十里行くものもあり。是も朝より晩まではやく走るにはなし。道のふかんなるものは、一日走るやうなれども、はかゆかざるもの也。

乱舞の道に、上手のうたふ謡に、下手の付けてうたへば、おくるゝ心ありて急がしきもの也。又、鼓・太鼓に老松をうつに、静かなる位なれども、下手は是にもおくれさぎだつ心あり、高砂は急なるくらいなれども、はやきと云ふ事悪しし。はやきはこけると云ひて、間にあはず、勿論おそきも悪しし、是も上手のする事は緩々と見へて、間のぬけざる所也。諸事しつけたるものとする事は、急がしく見えざる物也。此たとへ以て、道の理をしるべし。殊に兵法の道におゐて、はやきと云ふこと悪しし。

其仔細は、是も所によりて、沼・ふけなどにて、身足ともにはやく行がたし。太刀はいよいよ、はやくきる事なし。早くきらんとすれば、扇・小刀のやうにはあらで、ちやくときれば、少しもきれざるもの也。能々

分別すべし。大分の兵法にしても、はやく急ぐ心わるし。枕をおさゆると云ふ心にては、少しも遅き事はなき事也。亦人のむさとはやき事などには、背くと云ひて、静になり、人につかざる所肝要也。此心の工夫・鍛錬有るべき事也。

心を以て、其徳をわきまゆる事、是兵法の肝心也。

正保二年五月十二日

新免武蔵

寺尾孫丞殿

一、他流に奥表と云ふ事

寛文七年二月五日

寺尾夢世勝延（花押）

山本源介殿

兵法のことに於て、何れを表と云ひ、何れを奥といはん。芸により、事にふれて、極意・秘伝などと云ひて、奥口あれども、敵と打合ふ時の理におゐては、表にて戦ひ、裏を以てきると云ふ事にあらず。我兵法の教へやうは、初めて道を学ぶ人には、其わざのなりよき所をさせ習はせ、合点のはやくゆく理を先に教へ、心の及び難き事をば、其人の心をほどこる所を見わけて、次第次第に深き所の理を後に教ゆる心也。

されども、大形はその事に対したる事などを、覚へさするによつて、奥口と云ふ所なき事也。されば世の中に、山の奥を尋るに、猶奥へ行かんと思へば、又口へ出づるもの也。何事の道に於ても、奥の出合ふ所もあり、口を出してよき事もあり。此戦の利に於て、何をか隠し、何をか顕はさん。然るによつて我道を伝ふるに、誓紙・罰文などと云ふ事を好まず、此道を学ぶ人の智力をうかゞひ、直なる道を教へ、兵法の五道・六道のあしき所を捨てさせ、おのづから武士の法の実の道に入り、疑ひなき心になす事、我兵法の教の道也。能々鍛錬有るすべし。

右他流の兵法を九ヶ条として、風の巻に有増書付くる所、一々流々、口より奥に至る迄、定かに書顯すべき事なれども、わざと何流の何の大事とも名を書しるさず。其故は、一流々の見たて其道、其道のいひわけ、人により、心にまかせてそれぞれの存分有るものなれば、同じ流にも少々心の替わるものなれば、後々迄の爲めに、ながれ筋共書きのせず、他流の大跡九つに云ひ分けて、世の中の道、人の直なる道理より見せば、長きにかたづき、短きを理にして、強き・弱きとかたづき、あらき・こまかなると云ふ事も、皆へんなる道なれば、他流の口奥と顯はずとも、皆人の知るべき儀也。我一流に於いて、太刀に奥口なし、構に極りなし。唯

空之卷

二刀一流の兵法の道、空の巻として書顯す事、空と云ふ心は、物毎に形なき所、知れざる事を空と見たつる也。勿論空はなきなり。ある所を知りてなき所を知る、是則ち空也。世の中におゐて、あしく見れば、物をわきまへざる所を空と見る所、実の空にはあらず、皆迷う心なり。

此兵法の道におゐても、武士として道を行ふに、士の法を知らざる所、空にはあらずして、色々迷ひありて、せんかたなき所を、空と云ふなれども、是実の空にはあらざる也。武士は兵法の道を慥かに覺へ、其外武藝を能くつとめ、武士の行ふ道、少しも暗からず、心の迷ふ所なく、朝々時々におこたらず、心意二つの心をみがき、觀見二つの眼をとぎ、少しもくもりなく、迷ひの晴れたる所こそ、是れ実の空と知るべき也。

実の道を知らざる間は、仏法によらず、世法によらず、おのれおのれは慥かなる道と思ひ、善き事と思へども、心の直道よりして、世の大かねにあわせて見る時は、其身其身の心のひいき、其目其目のひずみによつて、実の道には背く物也。其心を知つて、直なる所を本とし、実の心を道として、兵法を広く行ひ、正しく明らかに、大きな所を思ひとつて、空を道とし、道を空と見る所也。空は善有り、惡には無し。智は有也、利は有也。道は有也。心は空也。

正保二年五月十二日

新免武藏

寺尾孫丞殿

寛文七年二月五日

寺尾夢世勝延(花押)

山本源介殿

